流通情報学部紀要の創刊に寄せて

学長　佐伯　弘治

流通情報学部の設置の主意を端的にいえば、情報科学と流通科学の有機的結合をはかることによって情報の世紀における合理的、効果的な流通システムのあり様を追求するものと、いうことになる。そして、それはまた、流通問題なかんずく物的流通に関する学問的研究と、その面の人材育成を謳う流通経済大学の建学の趣旨に真っすぐにつながるところでもある。しかも、この学部は名称も構想もわが国では他に類をみない。そんなわけで、私はこの学部がやがて本学を象徴する学部として世の注目をあつめるようになるであろうと期待している。

その流通情報学部がこの程紀要を出すことになった。開校後、日ならずして大部の「開校記念論文集」に取りかかり、今相ついで学部の顔ともいうべき「流通情報学部紀要」を発刊することになったのである。いうまでもなく、これは本学部の研究活動が軌道に乗りつつあることの証左であり、慶賀の至りである。

勿論、この学部のねらいは学生に流通と情報の専門的知識を身につけさせることにあるが、それは技術偏重の偏頗な人間をつくることではない。わが流通情報学部のもう一つの特色は、専門教育以上に教養教育にウェートをおいているところにあり、スタッフも人文、社会、自然の諸分野にわたって多士済々である。したがって本誌に掲載される論文もまた当然多岐にわたることになる。

ところで、本学には既に3種の紀要がある。創刊順に挙げれば、まず経済学部の「流通経済大学論集」(1966年創刊、年4回)であり、つぎは流通問題研究所の「流通問題研究」(1980年創刊、年2回)、3番目が社会学部の「社会学部論叢」(1990年創刊、年2回)である。そして、この「流通情報学部紀要」は4番手になる。

これら、先の3誌は創刊以来関係各位の努力によって休むことなく刊行されている。殊に、最も古い「流通経済大学論集」は、全国の大学が多かれ少なかれ紛争の嵐に見舞われたあの1968、9年頃にも遅滞なく発行されてきた。これを当り前のことといってしまえばそれまでであるが、経営基盤に絡む憂患をも抱えていた往時の本学を知る私とし

ては、逆風の中にあって、なお研究の灯火を絶やすまいと努めた当時の人たちの気概にあらためて賛辞を送りたい。そして、その意気が今の本学の研究的風土を醸成したのである。

もとより、これからは「流通情報学部紀要」もこの気風の一角に立つことになる。先陣の各誌と同様に学部の研究成果を遅滞なく、弛みなく世に問うてもらいたい。